

学位論文内容の要旨

学位申請者	山下 正美【論文博士】(比較社会文化学専攻 平成25年3月単位修得退学)	要 旨
論文題目	サハの口琴ホムス音楽の復興と再活性化	<p>この論文はロシア連邦サハ共和国（ヤクーチア）を中心に居住する民族であるサハの人々が、ホムスと呼ばれる口琴による音楽を復興し、再活性化させるプロセスの中で、中心的な役割を果たしてきたホムス奏者たちの諸活動を明らかにすることを第一の目的としている。さらに、そのホムス奏者たちが過去から現在、未来へと伝えていこうとしていることが何であり、またその活動が、ホムス音楽の伝承や伝播の仕掛けとして今日どのように機能しているのか、を考察することを第二の目的としている。申請者は、卒業論文以来継続して口琴の音楽とその奏者の活動について研究をしており、最初は日本の口琴の楽器学的な位置づけを再検討することであったが、博士前期課程において、アムステルダムでの国際口琴フェスティバルに参加することで、サハ共和国での口琴ホムスの音楽の豊かさに触れることで、サハ共和国に現地調査を行なうと共に、サハ語とロシア語の修得に務めた。その結果としてサハ共和国における口琴の音楽と奏者の活動を研究するに至った。博士後期課程においては、現地調査を重ねることと、トゥルク系民族の音楽の調査を交えながら、サハ共和国での音楽学研究を踏まえて、ロシア語による文献資料や音源、映像などの資料を渉猟し、サハの歴史と現在を結ぶホムス奏者の活動に焦点を当てた研究へと至った。現在のホムス奏者としては、イヴァン・アレクセイエフやスピリドン・シシーギンの活動を論じると共に、サハの現在の音楽学者であるガリーナ・アレクセーヴェの研究を基にして、ソヴィエト連邦時代に「民俗音楽から専門的音楽」へと口琴音楽を導いた作曲家であり理論家でもあったマルク・ニコラエヴィチ・ジルコフの『ヤクート民俗音楽』を紹介し、その音楽学的な位置づけを行なった。</p> <p>個人の音楽活動として始まったと考えられる口琴ホムスの音楽活動が、ソヴィエト連邦時代の「専門化」され「西洋化」の流れの中で他の民謡や民俗音楽と共に、舞台上での音楽となり、ソヴィエト解体後には口琴博物館の設置や口琴をテーマとする学術会議の開催など、ホムス音楽の復興と再活性化へと展開しているが、そこには市井のホムス奏者から著名なホムス奏者たちに至る重層的なホムスの担い手たちの諸活動が重要な役割を果たし、過去から未来への伝承の仕掛けであることが明らかになった。</p>
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	教授 秋山 光文	
	教授 棚橋 訓	
	准教授 中村 美奈子	
	聖徳大学 教授 徳丸 吉彦	